

## 神経難病患者に対する集団音楽療法の現状と課題

～病棟看護師のインタビュー調査から～

○河野小雪<sup>1)</sup> 今村優子<sup>1)</sup> 鈴木三和<sup>2)</sup> 杉戸和子<sup>2)</sup> 美原淑子<sup>1)</sup> 美原盤<sup>3)</sup>

1) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 音楽療法科

2) 同病院 看護部 3) 同病院 神経内科

### 【はじめに】

音楽療法は神経難病患者に対する緩和ケアのひとつであり、患者のQOLの向上に有用であると報告されている。当院では音楽療法士を中心とした音楽療法チームにより、神経難病患者に対する個別または集団音楽療法を積極的に提供している。今回、当院の神経難病患者に対する音楽療法の現状と看護師が音楽療法をどのように捉えているのかを明らかにし、今後の課題について検討した。

### 【音楽療法】

神経難病患者に対する音楽療法は、1回60分から90分間の集団音楽療法で、週4回程度、病棟内のオープンスペースで実施している。内容は、患者のリクエストを中心に音楽療法士がキーボードで演奏、歌唱している。音楽療法への参加は患者自身の意思を尊重し、いつでも入退室可能とし、患者の移動は病棟看護師が行っている。各セッション終了後、音楽療法士は参加した患者名と様子・リクエスト曲などを音楽療法日誌に記録している。

### 【対象および方法】

対象は、平成27年7月から平成29年7月までの期間(計440回実施)、音楽療法に参加した実患者数157名(延べ患者数1443名)とし、音楽療法日誌の記録から患者の基本属性、レスパイトを目的とした入院(レスパイト入院)の有無、リクエスト曲を調査した。また、病棟看護師を対象に音楽療法についてどのように捉えているかインタビューを実施し、KJ法でカテゴリー化した。

### 【結果】

対象の属性は、実患者数男性85名、女性72名であり、平均年齢は73.0±11.4歳(初回参加時の年齢)であった。疾患別の内訳は、パーキンソン病が全体の43%を占め、次いで筋萎縮性側索硬化症15%、脊髄小脳変性症8%、多系統萎縮症4%、筋ジストロフィー3%、進行性核上性麻痺2%、その他25%であった。レスパイト入院の有無については、55%の患者がレスパイト入院を利用し45%の患者が利用していなかった。また、リクエストした患者数が最も多かった曲は、「ふるさと」と「星影のワルツ」(10名)が最も多く、次いで「川の流れるように」(9名)、「赤城の子守唄」(8名)、「荒城の月」「湖畔の宿」「青い山脈」「東京だよおっ母さん」「高校三年生」「さざんかの宿」「古城」(6名)の順であった。

看護師を対象としたインタビュー調査の結果では、「患者同士の社会的交流」、「離床を促す機会」、「生活のリズムを獲得する場」、「水分補給を自然に促す場」、「家族の癒しの場」、「頻尿の改善」といった6つのカテゴリーが抽出された。

### 【考察】

当院の神経難病患者に対する集団音楽療法は、レスパイト入院を利用しているパーキンソン病患者が多く参加し、様々なジャンルの曲をリクエストしていた。

インタビュー調査から、入院生活の中で音楽療法の場は他者と過ごすことができる社会的交流、すなわちひとつのコミュニティとして確立していることが示唆された。また、集団音楽療法は、離床や頻尿の改善など身体的な側面からも有用であることが示された。今後は音楽療法の有用性をさらに高めるために、多職種間で連携し、それぞれの専門的視点から、より効果的な神経難病患者に対する音楽療法のあり方について検討することが課題である。